

HPV ワクチン（子宮頸がんワクチン）について

▶子宮頸がんとは？

子宮がんは、がん発生する部位で、子宮頸がんと子宮体がんに分けられます。日本における子宮頸がんは、約 1.1 万人/年が病気にかかり、約 2,900 人/年の女性が亡くなります。主な原因が、HPV（ヒトパピローマウイルス）の子宮頸部への感染です。20 歳代と 30 歳代に好発し、30 歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、毎年、約 1,000 人います。このように女性にとって予防したい“がん”の一つです。

▶子宮頸がんの 1 次予防と 2 次予防とは？

このワクチンでの予防は、2 つの方法があります。一つは HPV ワクチン（1 次予防）、もう一つは子宮頸がん検診（2 次予防）です。検診は、20 歳以上の方に 2 年に 1 度受けていただくように行政から案内が送付されます。ワクチンは、定期接種として小学 6 年生から高校 1 年生相当の女子が無料対象です。しかし、1993 年の HPV ワクチンに関する有害事象報道により接種率は一気に激減しました。1 次予防と 2 次予防の両方をしっかり実施することで多くの子宮頸がんを防ぐことができます。しかしながら、現在の日本では実施率は、1 次・2 次予防ともに実施率が低い現状です。

▶ワクチンの予防効果

HPV の中には子宮頸がんをおこしやすい種類のものがあります。HPV ワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。そのことにより、子宮頸がんの原因の 50～70%を防ぐことができます。2019 年以降、複数の北欧諸国から、ワクチンを接種した女性では、ワクチンを接種しなかった女性と比較して浸潤がんの罹患率が低いことが報告されています。つまり、子宮頸がんは HPV ワクチンによって予防可能であることが証明されました。WHO からの提言でワクチン接種率と検診受診率があがれば子宮頸がんが排除可能と提言されています。実際に、ワクチン接種率と検診受診率を高く維持しているオーストラリアでは、2028 年には子宮頸がんが撲滅のレベルに到達することが報告されています。

▶子宮頸がんワクチンの有害事象

多くの方が接種部位の痛みや腫れ、赤みなどを訴えます。思春期での接種は他のワクチンと同様に血管迷走神経反射による失神も起こることがあるため、接種後 30 分間は安静にすることや転倒予防が必要です。因果関係を問わない有害事象は、短期間で回復したものを含めて 1 万人あたり約 9 人です。因果関係を問わない重篤な症状は 1 万人あたり約 5 人に起こると報告されています。この中には接種後の広範囲な痛みや不随意運動等の多様な症状も含まれています。一方、ワクチン接種後に起こる多様な症状は接種歴のない方においても一定数存在することが報告されています。愛知県名古屋市では大規模な調査が行われ、様々な症状と HPV ワクチンとの因果関係は認められませんでした。既に世界中で広く、長い期間、使用されているワクチンです。WHO を含め世界中で安全性

が定期的に確認され、これまで推奨変更をした国はありません。
接種後に気になる症状が出たときは、かかりつけのお医者さんに相談してください。必要であれば、各県に設置されている専門の窓口で紹介され適切な治療を受けることができます。

▶**医師からの提言**

すべてのワクチンは、ベネフィット（有益な効果）とリスク（副反応）とがあります。まずは、子宮頸がん HPV ワクチンについて知ってください。そして、子宮頸がん罹患した患者さんの「何故、私は、子宮頸がんワクチンを接種していないの？」という質問に答えられるように、接種するかどうかを、家族やかかりつけ医で話し合う機会を作って下さい。